
願い事

バージニアスリム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

願い事

【Zコード】

Z9392V

【作者名】

バージニアスリム

【あらすじ】

主人公である無気力少年三島健太はある日、自信を天使名乗る少女と出会う。健太は主人公の願いを叶えるために人間界に舞い降りるが、健太には熱望する願い事がなく、取つてつけたような願いを少女に言ってしまう。その願いから二人は時間を共有することになるが、少女の破天荒な性格に振り回されてしまう健太。二人は無事願い事を叶えることができるのだろうか。

前編（前書き）

拙文ですが、読んでいただけすると嬉しいです。
感想等をいただけると、もっともっと嬉しいです。

突き刺さる寒さを肌に感じながら、僕は学校からの帰り道を歩いた。一月も半を迎えたが、吹き付ける風はまだまだ冷たい。ブレザーの上から学校指定の防寒着を羽織ついても、寒さを十分に感じ取れるほどだ。時刻は午後四時を回つたところだが、夕方と呼ぶには重すぎる空が、一面に広がつていた。

今日は家に帰つたらご飯を食べて、風呂に入つて、歯を磨いて、ちょっとだけテレビでも見て、そして、寝る。明日もきっとほとんど同じ。その次の日は学校が休みだから一田中家で「口口」口することになるだろう。友達とどこかへ出かけるのは、少しだけ面倒だ。学校が休みの日くらい家でのんびりと過ごしたい。

こんな変わらない毎日が続いているから、僕は何とかやっていくのだろう。来週も、再来週も、半年後も、一年後も、もしかしたら、このままずっと。小さな嫌気と大きな惰性を感じながら、僕は過ぎていく毎日を同じように生き続ける。そんな前向きではない考え方を、どこか冷静に受け止める自分がいる。しかたないよな、と。「はあ……」

吸い込めばのどを痛いほどに冷やし、吐き出せば空気を白く染める。ポケットへ突つ込まれた僕の手は、寒さのせいにしびれてしまつていて。なんの防寒も施されていない耳にいたつては、もう感覚すらない。けれど残念なことに、家に着くまではもうしばらく時間がかかるだろう。

家までの道のりを少しずつ消化しながら、ふと、僕は足を止めた。ズボンのポケットからはメール受信完了の音楽が流れている。緩慢な動作でケータイを取り出し、クラスの友人からあることを確認して、中身を見ずにポケットへと戻した。

ケータイの画面から視線を戻すと、目の前に大きな交差点があつた。この交差点を抜ければ、あとは一本道になつている。僕は何の

躊躇もなく足を前に出しあつとして、慌ててもとの位置に戻した。

「うわっ！」

何かがとてつもない速さで曲がり角から飛び出してきたからである。その「何か」は僕の目の前を猛スピードで横切ったかと思うと、急に地面を転がりだした。

「…………」

呆然と立ち尽くしたまま僕は一部始終を見守った。「何か」は僕から五メートルぐらい離れた場所で動きを止めていた。バイクか車か。いずれにしろそんなところだうと思つていた僕は、少しだけその「何か」に興味を持つてしまった。動きを止めたままピクリともしない「何か」に、恐る恐る近づいていく。

一步近付くと、その「何か」は真っ白であることがわかった。

一步近づくと、その「何か」はどうやら人の形をしていることがわかった。

三歩近づくと、もうビックからどう見てもそれは人間だということがわかった。

「…………はい？ ニンゲン？」

しかし、人間には本来ついていないものが、その「何か」にはついている。

幻想的なまでに白く、不思議な光を放つてているそれはどうみても……。

「…………」

「は、ね…………だよな？」

「はいそなんですよ三島健太さん！ 私は俗に天使と呼ばれるものでして！ 天使は羽根を標準装備しているのが現世での常識と聞いておりまして！」

「は、はあ」

「で、こんなところになぜ私のような天使がいるかというとですね！ なんと明日から三島健太さんにお世話になるからなんですよ！」

「は、はあ？」

アスファルトの上に体を寝かせながら、少女は突然に声を発した。

あれほど勢いで転んでいたのだが、けがをしていないようだ。いくら見ず知らずの他人だからといって、女の子がけがをしているところは見たくない。

少女が無事であることを確認すると、今度は少女の先ほどの言葉が気になる。「天使」という言葉を連呼していたはずだ。いつたい、なんなんだろう。はつきりって怖い。もしかしたら何か危ない薬をやつしている子なのかもしない。変な羽がついてるし。最近の世の中は狂っている、と母親が言つた気がするし。それとも宗教の人だろうか？こんなしょぼい町にまで来て布教活動をするからには、相当大きな宗教かもしない。

「あ、あのう。三島健太さん？どこか変なところでもありましたか？もしかして……あなたは三島健太さんじゃない……とかですか？」
……まずい。もう名前まで知られている。いつたいどうやつたのかは知らないが、この子、相当なやり手なのかもしない。

僕が疑心暗鬼になつていていたことに気付いた少女は、さつきまでの勢いとは打つて変わって、おろおろとし始めた。そんな様子を見ていると、なんだかこつちが悪いことをした気持ちになつてくる。

「あつてるよ。俺の名前は三島健太。健太でいいよ。で、いつたい何の用？ちなみに、俺、宗教とか興味ないから」

「あつ、やっぱりあつてましたか。それはよかつたです。ちなみに、わたしも人間界の宗教には興味がないですよ？」

少女は返事を受け取つて少しだけ表情をほころばせた。そのあまりに自然な笑顔に、僕の警戒心が小さくなつてしまつ。

少女は勢いよく体を起こした。転倒のダメージは全く感じられない。無理をしている、ことはないだろう。そんな事をする必要がないし、目の前の少女を見れば、元気であることは一目瞭然だ。

「えーとですね。突然すぎて申し訳ないんですが、私は天使です。難しい話は明日にでもするとして、今日は挨拶だけをしにきました。残念ながら今日はもうお別れなんですが、何か聞いておきたいことはないですか？」

真顔で私は天使です、と言われてもリアクションが取りにくく。

何を聞けばいいだろ？　目の前にいる少女が天使だということはまだ信じられないけど、「ほんとに天使ですか」と聞いても時間の無駄になるのだろう。そんなことよりもっと聞かなきゃいけないとがあるはずだ。もうすぐお別れだって言つてるし。早く質問を考えないと。ああでも何を聞けばいいのかわからねえし…どうしようどうしよう！

「な、なんであんなに走つてきてたの？」

ああ、なんてくだらない質問をするんだ！　もつと他に聞くことがあるだろ！

くだらない質問をしてしまった、と思つていた少女にとつてはそうでもないらしい。僕の質問を受けた少女はあごに手を当てて悩み始めた。

子供っぽい顔立ちのせいか、眉間に小さくしわを寄せる姿もかわいらしい。見た目十二、三歳に見える幼い顔立ちだけど、白く透きとおりそうな肌はキメ細かい。短く切りそろえられた黒髪は、幼い印象を打ち消して、何か神秘的な感じがした。来ている服は真っ白のワンピースにこちらも真っ白で薄手のロングスカートだつた。「私は天使です！」という彼女なりのアピールなのだろうか。

「それは……ですね」

さつきまで悩んでいた少女は、ようやく答えが出たのか、僕を真剣な瞳で見つめた。

「えーとですね。人間界に来る前に、ちゃんとこちらの常識を知つておこうとおもいまして、初対面の人との自然な出会い方、を勉強してきたんです。」

「ふんふん、で？」

「どうやらこちらの世界では、男女の自然な出会い方、というのは『曲がり角で勢いよくぶつかる』が一番ポピュラーだと聞いてましたので……」

……彼女はずいぶんと狭い範囲の知識を学んできたようだ。

「他に聞きたいことなどはないですか？」

「あ、ああ」

ぼぐがそういうと彼女は微笑みを浮かべた。小さな体を翻し、前を歩いて、振り返った。

「では、明日からよろしくお願ひします」

「えーと、じゃあ、また明日」

ぎこちない僕のあいさつを受け取って、少女は嬉しそうにまた微笑んだ。何がそんなに楽しいのだろう。僕の話し方が変なのだろうか。それとも純粋に、僕との会話自体を楽しんでくれているのだろうか。

「あっ、忘れていました！別れの挨拶をちゃんとしないと」

少女は素早く頭を振り上げると、僕のほうに向きなおった。

「でわ。健太さん。バ、バイビー！」

……思わず固まってしまった。時代遅れなんてかわいいもんじゃない。いくらなんでも古すぎる。

僕が絶句していることにも気付かず、少女は嬉しそうに帰つていく。固まってしまった僕の眼は、軽やかなスキップを決める天使を、最後まで見つめていた。

「……いや、それ、死語からな」

言葉は白いもやとなり溶けていく。聞こえるのは吹き付ける風の音だけ。

すこしだけ、身に刺さるような寒さを忘れていた。

「改めまして健太さん。私は人間界でいうところの『天使』です。人間界のイメージに合わせた格好をしているから、私が天使であることは一目瞭然ですよね」

少女はえへんと胸を反らせて言つ。

「まあ、言われてみれば天使っぽい恰好してるしな」

少女の話に、僕は適当に相槌を打つた。

「あと、天使たちは幸せを運ぶ対象者以外の人間には見えないんです。もちろん触ることや、気配を感じることもできません。『人払いの法』って言うんですけどね。だからこうして私と健太さんが会話をしていることも、他の人間には認識できないんです」

「……おおう。なんだかいかにも天使っぽいな」

「だけど私は力を上手に使えないのに、なぜか体が雨に触れてしまふと、たちまち『人払いの法』が消えてしまうんですよ」

「ん？ ジャあもし雨の日に外に出たら」

「対象者以外の人間にも見えてしまうんです。対象者以外の人間に姿を見られることはルール違反ですので。そうなつてしまつと私は天国へ帰ることなく、消えてしまうんですよ」

「そ、そうなのか。なんかいろいろ大変そうだな」

まあよつぼどのことがない限り大丈夫なんですけどねー、と少女は補足をいれた。

学校からの帰り道を歩いていると、少女は突然現れた。何もない空間から現れたのではなく、シンプルに曲がり角から登場した。どうやらまだ曲がり角でぶつかりたいのかもしれない。昨日ほどのスピードではなかつたものの、死角である曲がり角から真っ白天使が出てくるのは、あまり心臓に良くない。一度注意でもしてやろうか。僕の心配をよそに、少女は天使についてを話し続ける。

人に見られたらどうすんだと言つてやりたいが、先程の話を聞く限り人と会うことはないだろう。しかたなく、別の話題を探すことにする。

「そういうえば、何を基準に判断するんだ。『幸せを運ぶ対象者』っていうの」

少女はわずかに視線をこちらに向かへ、困ったような表情を浮かべた。

「うーん。難しい質問ですね。いろいろと選ばれる基準というのが

あるんですが……。一番のポイントは対象者が夢を持っている、といふことなんですね」

少女の言葉に思わず耳を疑つた。夢？そんな言葉には全然縁がないと思つんだが……。

「だからわたしは健太さんの元へやつてきたんです！さあさあ健太さん！私に健太さんの持つているありつたけの欲望を打ち明けてみなさい！」

「いや、そんなのないんだけど」

少女は僕のほうに顔を向けながら、その表情をどんどん変化させていった。しばらくすると、服装は真っ白なのに表情は真っ青のへんてこ天使が出来上がりてしまった。どうやらよっぽどショックだつたようだ。

「な、ないなんてそんなばかな。うそでしょ 健太さん」

「い、いや。ないもんはないし……」

そ、そんなあ！とオーバーにも地面にへたり込む純白天使にあわせて足を止める。夢、ゆめ、コメ……。どんなに考へてもそんなもんは思いつかない。小学生の頃は無責任な夢を描いたが、いまはもう、それがどんなものだったのかも思い出せない。大人になつた、というわけではないと思つ。現実の厳しさってヤツが、少しだけわかるようになつたんだ。「将来の夢は？」と聞かれて困つてしまつのも、きっとそういうことだろう。

「本当に何もないんですか？目標みたいな、堅苦しいものじゃなくていいんですよ？こんなことがしてみたいとか、一度でいいからあれをしてみたいとか」

「……ごめん。どんなに考へても思いつかねえ」

「うですか。ならしかたないですよね。少女は咳き、肩を落とした。

あからさまに元気をなくした少女と肩を並べて、僕たちは歩いていく。僕たちの足取りは重く、そのスピードも遅い。少女の歩く速さに合わせているつもりだが、もしかしたら、少女が僕に合わせて

くれて いるのかも しれ ない。

「…… 本 当に、何でもいいのか？」

少女の落ち込んだ様子を見て、僕は思わずそんなことを言つてしまつた。

「あ、あるんですか！」

笑顔で振り返る少女の視線から逃れるよつこにして、僕は話を続ける。

「まあ、あることはある」「

「そ うですか！ まあ当然ですよね。じゃないと私がここに来たのは間違いだつたつてことになりますもんね」「

少女は両方のこぶしをぐつと握つて、ガツツポーズを作つた。

「で、それって何ですか？」

僕はまっすぐに前を見つめながら、できるだけ平べつたい声で言った。

「こんな退屈な毎日を変えてみたい。できるひとなら、もつともつと楽しい毎日を、送つてみたい」

思いついた言葉をそのまま口に出しただけだが、こぞ口から出てみると、耳に残つた。少しだけすつきりとした心の中で、僕はそんなことを考える。

少女のまつに目を向けられない。なんとなく、恥ずかしいのだ。自分の言つて いることが、あまりに稚拙すぎる気がしてしまつから。僕と少女は無言のまま歩き続けた。歩くスピードはさつきまでと変わらない。ただ少しだけ、足取りが軽くなつた、気がする。

「ゆめ、あつたんですね」

少女は独り言のように、僕を振り返ることなく言つた。

「あるよ。一二十秒前からな」

僕も前に目を向けたまま、そう言つた

「それでは今日はこの辺で。また明日会いましょう。明日からは学校もお休みなんですよね？」

「ああ、そ うだな」

明日からは土曜日、日曜日、そして創立記念日を含む三連休となっている。友達と遊ぶ約束もしていなかつたので、断る理由はない。

「明日、一人で遊びに行きましょう。予定は空いてますか?」

僕は小さくうなずいて、そのまま何も言わなかつた。少女もそれ以上は何も言わず、また無言の時間が流れる。

一人して何も言わず、静かに流れる時間を打ち破つたのは、天使の一言だつた。

「それでは健太さん、バイビー」

……とりあえずあのへんな別れの挨拶だけは、今度会つたら注意しておこう。

せつかくの雰囲気を台無しにした天使に、ひそかに決意する僕であつた。

約束どおり、少女は次の日もやつてきた。

この日僕たちは何をしたのか。結論から言つと、『ぼくたちはキヤツチボールをした。ただしキヤツチボールといつてもただのキヤツチボールではない。少し一般のそれとは異なるキヤツチボールをしたのだ。僕としてはお互いが交互に球を投げあうあのキヤツチボールをしたかったのだが、少女が球を投げると途端に発火したり球が七つに分身したり、果ては音を立てて消滅してしまつたりと、まともなキヤツチボールができないのである。

何でこんなことになつてしまつたのかといふと。

「人間界に来る時に勉強したんです!なんでも人間界にいる多くの人は、燃える魔球や消える魔球や分身魔球を投げるとか!…そういえば健太さんはまだ何も魔球を投げていませんね。もしかして出し惜しみですか?それはいけませんね健太さん。秘められた能力を解き放つべきは今ですよ!さあさあどうぞ健太さん!どんな球でもこ

のわたくしが全力をもつて受け止めてあげましょー!」こんなこと
もあらうかと人間界に来る前にわた
「

という訳である。

次の日、またまた少女はやつてきた。この日僕たちは何をしたのか。結論から言つと、ぼくたちはP・Kをした。ただしP・KといつてもただのP・Kではない。少し一般的のそれとは異なるP・Kをしたのだ。僕としてはお互いが交互にキーパーとキッカーをするP・Kをしたかったのだが、少女がボールを蹴ると途端に発火したり、ボールが七つに分身したり、果てはボールがネットを突き破りキランと音を立てて星になつてしまつたりと、まともなP・Kができないのである。

何でこんなことになつてしまつたのかといつと。

「人間界に来る時に勉強したんです!なんでも人間界にいる多くの人は、キック力を増強させるシユーズを穿いていたり稻妻シユートなる発光するシユートが打てたり打つたシユートがなぜか自然発火したりするそうですね!そういえば健太さんはまだ何も摩訶不思議シユートをうつていませんね。もしかして出し惜しみですか?それはいけませんね健太さん。秘められた

」
というわけである。

そして今日、約束をしていなかつたはずなのに少女はやつてきた。僕以外の人間に見えないので、少女は周囲を気にすることなく堂々と玄関から入つてくる。幸いなことに我が家の両親は仕事に出かけ家にいない。

「健太さん。遊びに来ましたよー。今日は何をしましょーかー?野球、サッカーときたら次はバスケットですかねー?」玄関の扉開けたまま、少女は大きな声を出した。

連日のオーバーワークのせいか、それとも日ひの運動不足のせいなのか、ふとんから起き上がるだけで体中の筋肉が悲鳴を上げている。時計を覗き込み、今が十一時であることを確認する。だるい。めんどくさい。ゆっくりと眠りたい。

僕はのろのろとジャージに着替え、大きなあぐびを連発する。

のんびりとしたい。家にいたい。もつすぐ始まる期末試験に向け、

勉強するのもいいだろう。

リビングにおかれた菓子パンにかぶりつく。冷蔵庫にある牛乳を胃の中に流し込む。

「もー。遅いですよ健太さん。限りある時間は有意義に使わないと！タイムウイズマネーなんですからね！」

「いや、ウイズじゃなくてイズだからな」

靴ひもをきつく結びながら、少女の話を聞き流す。早く早くといいながら、少女はあしふみを鳴らす。

「つーか、感謝しろよ？せつかくの休みをつぶしてまで遊んでやるんだから」

「しますします。わざ、行きましょつか健太さん。早くしないと近所の子供たちに場所を取られてしまいますよ？」

僕は玄関の扉をゆっくりと開く。

「つたぐ。めんどくせーなー」

「またまたあ。まんざらでもないつて顔してますよ。健太さん」

家から歩いて五分のところにある公園に、僕たちは来ていた。

「ほらほら健太さん。早く早く」

「こつちは連日の死闘のせいで体がくたくただつてのに、いい気なもんだな」

「はい？なにか言いましたか？」

「なんでもねーよ。で、今日は何をするんだ？」

「そうですねー。バスケット用の「ゴール」がありませんので、バスケットはできませんし……。シンプルに鬼ごっこなんてどうでしょう？」

空は雲ひとつない快晴で、照りつける太陽はじんわりと体を温め

？」

てくれる。一月といつてももう半ばだ。春が来たとはいえないが、冬の季節はすこしづつ身を潜めつつある。

「鬼ごっこなあ……。一人つきりでやつても多分つまんねえぞ？」

「大丈夫です！鬼ごっこという遊び自体が面白いので、たとえ人数が少なからうと何の問題もありません！」

「そ、そうなのか」

だだつ広いだけが特徴のグラウンドには、僕たち以外に誰もいない。『人払いの法』とやらがうまく働いているのだろう。

「それでは鬼ごっこを開始しましょう。どちらが鬼でスタートしましょうか？」

「最初は俺がやるつか。ま、どうせすぐに交代するけどな」

僕の言葉を聞くと、ニヤリ、と少女は黒い笑みを浮かべた。

「ふふふ。どうやら健太さんはまだ私のことを甘く見ているようですね。この一日間。健太さんは一度も私に勝つていないうことを、忘れたわけではないでしょ？」

「あー。あと今日は変な天使パワーは使用禁止だから。フェアにいこうぜフェアに！」

「ええエエエ！そんなあ！いくらなんでもそれはひどいですよ！そんなことまでして健太さんは勝負に勝ちたいんですか？」

だだつ広いグラウンドの端には雑草が身を寄せ合つて生えていた。花を咲かせているものは一つもなかつたが、小さなつぼみを持つているものはいくつかあつた。もつすぐそこまで来ている春を待つているのだろう。

「ああ勝ちたいね。こつちはこの一日間、燃えるボールをキャッチしたり、発光するシユートをキャッチしたりでもうへろへろなんだよ。それに、三連休の最後ぐらい、有終の美を飾りたいだろ」

「……仕方ありませんね。そこまで言うのなら人間界の標準身体能力のみにしておきましょう。もつとも、その程度のハンデで埋まるような実力差ではないのですが」

少女は演技がかつた仕草でファサツと髪をかき上げた。

「後で泣き」と言つてもしらねえからな?」

「その言葉がすでに敗者のセリフですよ、健太さん。せいぜい私を楽しませてくださいな?」

木の枝にとまつた小鳥たちの声が聞こえる。数は少ないようだ、その鳴き声もまだ知らない。それでも小鳥たちは鳴き続ける。声を仲間たちに届かせるように、すぐそこにある春をよびよせるように。

「では始めますよー。よーい、スタートですー!」

「……もひ、だめだ。マジ、……死んじまつ……」

鬼ごっこという名の拷問を終えて、僕は自室に体を投げ出していた。けつきよく、この三連休で天使を打ち負かすことはできなかつた。三戦全敗。だけど不思議なくらいに気分はすつきりしている。田ごもりの運動不足を、この三連休で解消できたおかげだろうか。

ふうひ、と大きく息を吐いて痛む体をむりやりに動かす。疲労は限界にまで達しているのだが、運動のせいで、頭が異様なまでに興奮している。テレビでも見てごろごろしよう。そう思いリモコンを探したのだが、あいにく見当たらない。仕方なしに体を引きずり、テレビ本体の電源をつける。しばらくの沈黙の後、一ハインチの地デジいっぱいに、簡略化された日本地図が広がった。

「うわっ、来週からずっと雨かよ……。学校があるのにめんじくせえなあ」

お天氣のお姉さんは、眉を八の字にしながら、洗濯物を干すなり今の中にと注意を促している。その横では、今日の日付の下に、お日様マークから傘マークに矢印が出ていた。晴れのち雨。早ければ今日の夜からでも雨が降る、とお姉さんは残念そうな顔をしている。敗因の大きな原因是、僕のいらぬ一言にあった。『人間界の標準身体能力』とやらにあわせた少女は、まさに見た田ごもりの身体能

力だった。はつきり言つて、ぜんぜんダメダメだったのだ。まさかそこまで自分を制限するとは思つていなかつたので、少女が鬼ごっこを楽しめないと思い、つい言つてしまつた。

「もつと本気を出していいぞ？」

……今思い返してみても、あの一言は言つんじゃなかつたと思う。僕の言葉を挑発だと思つた少女は、恐るべき力を見せ、僕を死地一歩手前にまで追い詰めたのだった。……精神年齢だけは見た目通りのようだ。

僕としては断固お断りしたかつたのだが、少女と写真を撮つてしまつた。三戦全勝記念、らしい。最後まで拒否を唱えていたのだが、「まだ、鬼ごっこします？」という少女の一言が決め手となつた。ちなみに、その写真は僕の勉強机の上に放り出されている。……で、きるここなら捨て去つてしまいたいのだが、そんなことをしたら僕に明日はないだろつ。

テレビ画面上は、天気予報から今日のニュースに変わつていた。昨日起こつた殺人事件が、人を変え、場所を変えて今日もどこかで起きている。そんな深刻で、だけどどこにでもあるニュースをてきとうに耳で拾いながら、僕は窓の外に視線を移した。

切り取られた空には灰色の雲が充満していた。少女と出かけるころはあんなにも晴れていた青空が、今はもうない。この曇り空が、あの青空なんだ。僕はぼんやりと、そんなことを思った。

「明日、学校なのにな……」

つぶやいた言葉は、誰の耳にも届くことなく、消えていった。

僕は窓の外を見つめながら、聞いてもいらないニュースの音だけを、耳に流し込む。

時間がたつにつれ、暗く、重くなる空を見つめながら。

続
<

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9392v/>

願い事

2011年10月9日08時12分発行